

2012年度 人間福祉学部報

■ 社会福祉学科



社会福祉学科は2012年11月現在、1年生144名、2年生141名、3年生162名、4年生133名の総勢580名の学生から構成されています。各学年ともに男女比は約1対2であり、他学部他学科と比べても、女子学生の多い学科です。2012年3月には、卒業生106名をはじめ送り出しました。そのなかで進学や留学・資格取得などを除き就職した学生は約91%、そのうち、43.5%が医療・福祉系へ、9.8%が公務員に、43.6%が金融・保険・飲食・製造など一般企業に就職しています。また35名が社会福祉士国家資格を、7名が精神保健福祉士国家資格を取得しました。

卒業生の進路や資格取得状況からうかがえるように、社会福祉学科の特徴のひとつとして、大学での専門的な学びを卒業後の進路や将来のキャリア形成と結びつけやすいことがあげられるでしょう。医療・福祉系に就職した学生や福祉職で公務員試験に受かった学生の多くが、3年次に経験する「ソーシャルワーク実習(旧社会福祉援助技術演習)」という科目を通じて実践現場の醍醐味や実情に触れ、社会福祉に関係のある仕事につくことを決意しているようです。この科目では、社会福祉の機関・施設で働く社会福祉士や学科教員から直接指導を受けながら、学生が機関・施設で180時

間に及ぶ実習体験を行います。社会福祉士国家資格の受験資格を得るために、修得しておかなければならない科目です。しかしこの授業を履修するには、1年次から所定の授業を修得しておくことが必要です。今回はそのなかでも、2年次で履修する中心的科目「ソーシャルワーク演習Ⅱ」をとりあげ、その内容を紹介します。

ソーシャルワーク演習Ⅱは、①体験的な学びを通じてソーシャルワークの実際を理解し、支援する能力を養うこと、②3年次のソーシャルワーク実習に備えた実習配属を目的としています。クラスの学生数約12～14人で構成され、2012年度は8クラスが開講、11人の教員で担当しました。

まず①に関して、事例や新聞記事などできるだけ生の素材を用いて、学生が個人ワークやグループワークを行ったり、多機能演習室で面接技術の練習をしたりすることで、ミクロレベルのソーシャルワークの価値、知識、技術を通年で学びます。グループ作業を通じて他の学生と意見を交換し話し合うことを通じて、ソーシャルワークで重要な“価値観や物事の見方の多様性”に気づく学生も多いようです。そして秋学期から、メゾ・マクロレベルの知識や技術に特化した授業も始まります。2012年度は、インターネットを通じた社会

保障制度のデータの検索や、地域福祉計画の策定について学びました。

さらに秋学期には、②の、学生が次年度にどの領域のどの施設・機関に実習に行くのか決める実習配属が始まります。学生はひとり一人、自分は何のためになぜ実習に行くのか自分を振り返り、実習に行くのか行かないのか、行くなればどの領域を志望するのかということ、ミクロ実践を教えているクラス教員と話し合いながら、決めていきます。また、実習に行った3年生の実習報告会が10月に開催されますので、学生はこれに出席し、先輩の実習体験を聞くことで、自分の志望領域を決める参考にします。こうしたプロセスのなかで、部活やその他の課外活動、卒業後の自分の進路、この授業で気づいた自分の適性などを考え、悩みぬいて、実習に行かないという選択をした学生もいました。実習に行くか行かないか、行くとすればどの領域かを決めることは、今後の学生生活のみならず、もしかしたら将来のキャリアをも左右するかもしれないので、教員も真剣に臨むよう努めます。

以上のプロセスで終わりではなく、次年度にソーシャルワーク実習を希望する学生は、試験を受けなければなりません。その試験の結果、学生の志望、通勤時間や適正など諸々を踏まえて、学生が実習することになる具体的な機関・施設を決めていきます。2012年度はほとんどの学生が第一志望の領域に配属されましたが、実習先としてお願いしている機関・施設数がもともと少ない領域を志望していた学生の中には、第二志望以下に配属された学生もわずかにいました。その場合も、必ず本人に事情を説明し、理解してもらったうえで、同意を得ます。こうして学生が次年度行くことになる実習先が決まりますが、その間、教員と学生間、学生同士、そして教員間でも、悲喜こもごもの様々なドラマが展開されます。

ここで追加すると、2年生の秋は、3年次から所属するゼミ(研究演習Ⅰ)を決める作業も入ります。これも、自分の関心や将来の進路などを見据えて、自分は何を学びたいのか、どのゼミを志望するのか、決めなければなりません。社会福祉学科の多くの学生にとって、2年の秋は、自分たちの学生生活や今後を左右するような選択を迫られ

る時期とってよいでしょう。

2013年度の2年生にも、ソーシャルワーク実習はもちろん3年ゼミ選択に関してよりよい選択・決断をできるよう、我々教員側もしっかりサポートしていきます。(安田美予子)

■ 社会起業学科



社会起業学科が開設されて5年目を迎えました。本年度は、社会起業学科に87名の1年生が新たに加わり、2年生77名、3年生76名、4年生76名とともに、計316名が、社会起業について、学び、経験し、実践しています。

人間福祉学部がスタートした2008年度以降、本学科では、文部科学省大学教育推進プログラム(GP)(2009～2011年度)をはじめ、さまざまな取り組みを行ってきました。それぞれについて、反省点や課題、学ぶべき点が多く、それらを、教職員はもちろんのこと学生とも共有し改善しながら、本学科にとって、学生にとって、さらには社会にとって、より有意義で魅力的な取り組みとなるよう改善に努めてきました。

2012年度は2011年度末をもってGPが終了したこともあり、結果として取り組みの幅が狭まってしまうりましたが、学科合宿、英語短期留学、インターンシップ、フィールドワーク等を積極的に行いました。概要は次のとおりです。

①社会起業学科新入生合宿

日 程：2012年4月21日(土)～22日(日)

会 場：関西学院大学G号館及びスポーツセンター

参加者：83名(スタッフ、教員を含む)

内 容：学生団体紹介、ゲストスピーチ、礼拝、アクティビティなど

[ゲスト]

川口加奈 氏

(NPO法人Homedoor理事長)

松本浩美

(本学科3年生、NPO法人Homedoor理事)

今井紀明 氏

(NPO法人D×P共同代表)

[参加学生団体]

AIWISH、IPE、CASA、学生ドリブラ、KGC、SHIPs、TFT、株式会社ミライロ

②英語短期留学

社会起業学科独自のプログラムである英語短期留学により、2年生8名が、2012年5月1日に日本を出発し、カナダ・クイーンズ大学のSchool of Englishが提供する12週間の英語学習プログラム(EAP、English for Academic Purposes)に参加しました。グローバルに社会貢献するための英語コミュニケーションの能力を高めるとともに、各自が独力で現地の社会貢献機関を訪問してその内容を英語のレポートにまとめることにより海外の

社会起業の知識も深めるなど、非常に有意義な学びの機会となりました。8月4日に全員無事帰国し、11月には報告会で自らの体験を発表しました。

③インターンシップ

1)国内インターンシップ

2年次のインターンシップ演習における事前学習と分野選択を踏まえ、国内の社会的企業、NPO、福祉・介護関係機関及び団体、公的機関、民間企業などにおいて、3年生の夏季休暇中に3週間のインターンシップを行いました。インターンシップ先は次のとおりです。

- ・一般社団法人ノオト(兵庫県篠山市) 2名
- ・NPO法人オーガニックライフコラボレーション(神戸市東灘区) 1名
- ・NPO法人しゃらく(神戸市須磨区) 2名
- ・アート・マイル・ジャパン(兵庫県赤穂市) 1名
- ・NPO法人宝塚NPOセンター(兵庫県宝塚市) 1名
- ・箕面市役所地域創造部商工観光課(大阪府箕面市) 1名

2)海外インターンシップ

海外での社会貢献活動について学ぶこと、海外での実践力を高めること、異文化の環境のなかで働く能力を養うこと、社会の問題と課題を把握し取り組む能力を高めること、を目標に、夏季休暇中に6週間のインターンシップを行いました。インターンシップ先は次のとおりです。

- ・Kanlungan sa ER-MA Ministry, Inc (フィリピン) 1名
- ・International Training College (オーストラリア) 1名
- ・Sunshine State Surfing School (オーストラリア) 1名
- ・Lyndhurst Early Learning Centre (オーストラリア) 1名
- ・Multilink Community Services Inc. (オーストラリア) 1名
- ・Playhouse Parent & Child Care Centre (オーストラリア) 1名
- ・International House Brisbane (オーストラリア) 1名

3)アドバンスト・インターンシップ

- Kanlungan sa ER-MA Ministry, Inc (フィリピン) 1名

④フィールドワーク

1)国内フィールドワーク

“現場から学ぶ社会起業の課題と取り組み”として、街に出て、社会的な課題に直面してい

る当事者の方や課題解決に向けて取り組みを行っている社会起業家にお会いし、直接社会の課題の現実と、取り組む姿勢を学ぶことを第一の目的に、人と会い、質問しながらお話を聞き、それをまとめて整理し、他人に伝える技術を獲得することを第二の目的に、授業を進めました。フィールドワーク先は、次のとおりです。

- ・NPO法人住まいみまもりたい(大阪府大東市)
- ・NPO法人山科醍醐こどものひろば(京都市山科区)
- ・NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝(大阪府箕面市)
- ・多文化プロキューブ(神戸市長田区)
- ・神戸芸術工科大学曾和研究室(神戸市西区)

2)海外フィールドワーク

「現場で学ぶ国際協力」をテーマに、事前に海外フィールドワーク演習で1つの国について体系的に調べる練習をしたうえで、2月にカンボジアを訪れ、子どもの教育、人身売買、ストリートチルドレンの課題に関わっている団体や施設への訪問を行って、途上国が抱える貧困の課題と国際協力、社会起業の現状について学びました。

⑤実践教育報告会

人間福祉学部各学科の実践教育を報告する場として12月に開催された人間福祉学部実践教育報告会において、インターンシップを行った学生(国内・3名、海外・5名、アドバンスト・1名)が、ポスター発表を行いました。

■ 人間科学科



2012年度報告の前に、学科開設から4年の節目に関連した報告をしたいと思います。

これまでの報告にも有りますように、2008年に女性42名、男性54名の初めての入学生を迎え入れたことに始まって、2011年度には女性213名、男性232名と445名の学生が、人間科学科で学ぶにいたりました。そして、2011年度末に、88名の卒業生を一期生として送り出しました。就職決定率も97%を超え、多くが自らの望む道に進んでくれたことから、彼らが、先輩のいない一期生らしく、きまじめに、また、伸びやかに、学業やクラブ活動に取り組み、実りある学生生活を送ってくれたものと確信しています。

初めて卒業生を送り出しましたが、教員にも異動がありました。4年間高齢者をテーマに指導してくださったエルスマリー・アンベッケン先生が退任され、2012年度から高齢者福祉などを専門領域とする市瀬晶子先生が新たに加わっていただきました。アンベッケン先生には、4年間のお働きに感謝したいと思います。また、市瀬先生とこれからともに働けることをうれしく思っています。

さて、4月に、また新たに102名の学生を迎え、2012年度がスタートしました。基礎演習のクラスを増やし、10人ほどのクラス構成になりました。担当の教員とのかかわりは、より密なものになっています。

学科の理念の理解を深めてもらうと同時に、学科で何を学べるかをより具体的に感じてもらうことを期待して、人間科学入門が春学期に開講されています。「佐藤君の一生」というストーリーのもとで、各教員が自らの専門領域に関連した講義を行う形も4年目を迎えましたが、学科の理念である、心身、老若、死生の軸を通して人間を包括的に理解することを学ぶ、その導入として役立っていると感じます。

この人間科学入門に加え、2012年度から、人間科学実習入門が秋に開講されました。人間科学入門で学んだ各教員の専門領域について、より具体的に学ぶ機会となるものです。大きく二つのクラスに分け、50人ほどのクラスでのオムニバスでの開講ですが、教員各自が、まさにそれぞれの専門性に沿って工夫をこらしたものになりました。

この実習入門では、教室での学びだけでなく、合宿を、これも2つのグループに分けて、10月20、21日、10月27、28日と、2回行いました。甲山自然の家での一泊の合宿ですが、朝9時の体育館での集合から学習が始まるタイトなプログラムです。まず、心拍計を着用し、折々に心拍数をチェックしながら甲山登山を行いました。運動負荷が身体に及ぼす影響を数字としてとらえることは、学生たちにとって自らの体に目を向けるよいきっかけになったと思います。また、グループに分かれて、自らを知るワークを行いました。これも、普段直

面せずに過ごしてきた自らの心のあり方、自らの存在に目を向けるよい機会となったようです。野外料理がプログラムの最後を締めくくりましたが、一緒に食べる食事を、各人それぞれが役割を持って作ることは、個だけでなく、集団としての人のあり方にも、学生の皆が改めて気づく機会になりました。

学生の疲れた中に力強さを感じさせる表情から、一泊二日の濃密な体験が、学生同士の関係をいっそう深いものにしてくれたように感じました。な

お、プログラムの多くが佐藤先生、甲斐先生の力にたよるものであったこと、また実践教育支援室の藤崎、橋川両助手の助けをえてのものであったことを付記しておきたいと思います。

人間科学科では、「人間科学科の100冊」として、教員からの推薦図書を学生に示しています。4年がたち、最初に述べたように教員の異動があったことや、また時代の変化に応じるために、何冊かを差し替えることになりました。新たな「百冊」にも目を通してもらえることを期待しています。

■ 言語教育

必修外国語科目の英語講読と英語表現では、学生の習熟度と第2外国語の選択科目に対応するため、新1年次生のクラス編成を14から15へ増加しました。流暢さの向上と素早かつ確に情報を読み取る能力を養うために英語講読で行っている多読課題は、副読本の拡充と管理の適正化をはかり、図書館蔵置の割合を大幅に増やしました。

専門教育への橋渡しとなるべく、人間福祉学部の社会福祉・社会起業・人間科学3学科の教員が分担執筆したテキスト（『Living in Society: From People to Persons』2011年1月、南雲堂）は2年次の英語講読で引き続き使用しています。

英語コミュニケーションの授業では英語による異文化間コミュニケーション能力育成をはかり、ゲストスピーカーを招いた授業や交換留学生との交流を取り入れた授業も行っています。

この他に、人間福祉学部では第2言語として英語コミュニケーション、フランス語、ドイツ語、中国語、朝鮮語、スペイン語、日本手話を開講しています。また、外国人留学生用に、日本語I（必修科目）、基礎英語（選択科目）を開講しています。

全学的な目標の一つに全地球的規模で活躍でき

る人材を育成することがありますが、その必須条件である語学力、特に英語を効率的に伸ばせる教育条件を整えることが求められています。なかでも学生個々の能力に応じた習熟度別クラス編成をおこなうためにはプレースメントテストが必要です。人間福祉学部では既に独自に作成したプレースメントテストを一年次の春学期開始前と秋学期終了時に行っております。このテストには文法、読解とともに聴解能力を測るリスニング問題があり、従来はリスニング問題を録音作製する際に雑音の少ない環境を探すのに苦労していました。しかし2012年春、教材開発室の一角に防音ブースが設置され、早速次回のリスニング問題用音声収録に用いられました。今後外国語だけではなく、他の音声教材作成にも活用されることと期待しています。また録音に必要な単一指向性マイク1本・半指向性マイク2本、4ch ミキシングコンソール、マルチch ポータブルICレコーダ、編集用ラップトップPCとソフトウェア、モニター用スピーカー/ヘッドフォン等も準備されました。

（福居誠二）



■ チャペル

日時	担当者	主題（奨励題）
4月9日(月)	嶺重 淑（宗教主事）	チャペルオリエンテーション①
11日(水)	嶺重 淑（宗教主事）	「地の塩として歩む」
13日(金)	嶺重 淑（宗教主事）	チャペルオリエンテーション②
16日(月)	広瀬 康夫（吉岡記念館職員）	讃美歌練習①
18日(水)	石川 久展（社会福祉学科教員）	「聖書を読もう」
20日(金)	広瀬 康夫（吉岡記念館職員）	讃美歌練習②
23日(月)	藤井 美和（人間科学科教員）	「愛されるということ」
25日(水)	聖歌隊	讃美歌練習③
27日(金)	中野 陽子（人間福祉学部教員）	「祈りについて考える」
30日(月)	グリークラブ	音楽チャペル
5月2日(水)	嶺重 淑（宗教主事）	「タラントを活かす」
4日(金)	ゴスペルクワイア（P.O.V.）	音楽チャペル
7日(月)	川村 暁雄（社会起業学科教員）	共に生きる①
9日(水)	河鱈 一彦（人間科学科教員）	共に生きる②
11日(金)	孫 良（社会起業学科教員）	共に生きる③
14日(月)	混声合唱団エゴラド	音楽チャペル
15日(火)	大学合同チャペル（第1日）	} 総主題：「建学の精神」
16日(水)	大学合同チャペル（第2日）	
18日(金)	才村 純（人間科学科教員）	共に生きる④
21日(月)	窪田 真人（神学部OB）	「先生と呼ばれること」
23日(水)	上ヶ原ハビタット	活動報告
25日(金)	永田雄次郎（文学部教授）	共に生きる⑤
28日(月)	バロックアンサンブル	音楽チャペル
30日(水)	嶺重 淑（宗教主事）	讃美歌を歌おう
6月1日(金)	嶺重 淑（宗教主事）	共に生きる⑥
4日(月)	小西加保留（社会福祉学科教員）	共に生きる⑦
6日(水)	学部合同チャペル	於）中央講堂
8日(金)	木原 桂二（北山バプテスト教会）	「真実に命を生かすもの」
11日(月)	遠藤 知子（社会起業学科教員）	共に生きる⑧
13日(水)	福居 誠二（人間福祉学部教員）	共に生きる⑨
15日(金)	宗教総部献血実行委員会	献血週間を覚えて
18日(月)	打樋 啓史（社会学部宗教主事）	共に生きる⑩
20日(水)	嶺重 淑（宗教主事）	讃美歌を歌おう
22日(金)	ハンドベルクワイア	音楽チャペル
25日(月)	西田 織帆（社会起業学科4年）	「アジア人として：テゼ共同体で気づいたこと」
27日(水)	嶺重 淑（宗教主事）	「見えるものと見えないもの」
29日(金)	田部 朋彦（神学部D3）	「人間存在の尊さ」
7月2日(月)	小西砂千夫（社会起業学科教員）	共に生きる⑪ 「『できます』の真実」
4日(水)	聖歌隊	音楽チャペル
6日(金)	市瀬 晶子（人間科学科教員）	共に生きる⑫
9日(月)	樋口 進（宗教センター宗教主事）	「言葉の大切さ」
11日(水)	牧里 毎治（学部長）	「人間福祉の人間について」
13日(金)	嶺重 淑（宗教主事）	夏休みを前にして

日時	担当者	主題（奨励題）
9月21日(金)	住野 公平（人間福祉学部職員）	「幻を書き記せ」
24日(月)	嶺重 淑（宗教主事）	「古いものと新しいもの」
26日(水)	嶺重 淑（宗教主事）	映像で見る関学の歴史
28日(金)	創立記念学部合同チャペルに合流	「123年前に据えられた土台」
10月1日(月)	嶺重 淑（宗教主事）	讃美歌を歌おう
3日(水)	大宮 有博（名古屋学院大学教員）	「待つという希望」
5日(金)	宗教総部献血実行委員会	秋の献血週間を覚えて
8日(月)	ゴスペルクワイア（P.O.V.）	音楽チャペル
10日(水)	前川 裕（同志社大学嘱託講師）	「イエスは「子供好き」？」
12日(金)	木村 愛（経営戦略研究科職員）	「二度とない人生だから」
15日(月)	田村久瑠美（人間福祉研究科1年）	「インドから得たもの」
17日(水)	Ruth M. グルーベル（院長）	「偏見との戦い」
18日(木)	大学合同チャペル [第1日]	} 総主題：「いのち」
19日(金)	大学合同チャペル [第2日]	
22日(月)	表谷 純子（英語科教員）	共に生きる ^⑬
24日(水)	上ヶ原ハビタット	活動報告
26日(金)	柴田 学（人間福祉実習助手）	「「受け止める」ことと「受け入れる」こと」
29日(月)	嶺重 淑（宗教主事）	「実りある人生」
31日(水)	バロックアンサンブル	音楽チャペル
11月7日(水)	嶺重 淑（宗教主事）	讃美歌を歌おう
9日(金)	川崎真理子（英語科教員）	共に生きる ^⑭
12日(月)	広瀬 康夫（吉岡記念館職員）	音楽チャペル
14日(水)	藤川 義（人間科学科4年）	「名前を呼ばれる」
16日(金)	聖歌隊	音楽チャペル
19日(月)	宮野 麻里（人間科学科4年）	「一歩踏み出すこと」
21日(水)	エルス・マリー アンベッケン （スウェーデン・リンショーピン大学教員）	「ボーダーを越えて」
26日(月)	ハンドベルクワイア	音楽チャペル
28日(水)	宗教総部献血実行委員会	冬の献血週間を覚えて
30日(金)	中村ゆかり（教務補佐）	クラリツ作り
12月3日(月)	嶺重 淑（宗教主事）	アドベントを覚えて
5日(水)	嶺重 淑（宗教主事）	クリスマス讃美歌練習
7日(金)	上山美津穂（人間科学科4年）	「I surrender to You」
10日(月)	大学合同クリスマスチャペルに合流	「主は見ている」
12日(水)	クリスマスを前にして	音楽チャペル
14日(金)	上ヶ原ハビタット	活動報告
17日(月)	嶺重 淑（宗教主事）	「最高の贈り物」
19日(水)	人間福祉クリスマス（祝会）	（下記参照）
21日(金)	人間福祉クリスマス（礼拝）	（下記参照）
1月7日(月)	信山 梓（社会福祉学科4年）	「ここにいるということ」
9日(水)	学部合同震災記念チャペル	阪神淡路大震災を覚えて
11日(金)	牧里 毎治（学部長）	「グローバルについて」

*前記のように、今年度は、春学期43回、秋学期41回、計84回（合同チャペルを含む）のチャペルを実施した。今年度は平均して例年以上に出席者が多く、特に音楽チャペルには毎回多数の出席者が見られた。奨励の多くは学部の教職員、学生他が担当し、また今年度は特に「共に生きる」という共通テーマで計15人の先生方に奨励していただいた（学部のクリスマスチャペルについては下記報告参照）。来年度は今年度の反省を踏まえ、さらに充実したチャペルプログラムを提供できるよう努めていきたい。

※2012年度学部クリスマスチャペル報告

学部のクリスマスチャペルは昨年と同様、クリスマス礼拝とクリスマス祝会を分けて実施し、クリスマス祝会を12月19日（水）の夕刻（18：10～19：40）にG号館2階ラウンジで開催し、クリスマス礼拝は12月21日（金）の通常のチャペル

アワーの時間帯（10：35～11：05）に実施した。クリスマス祝会では、最初に短く礼拝の時間をもってハンドベルの演奏を聴いた後に「祝会」の部に移り、学部の学生・教職員がともに軽食をともにいただきながら、口笛演奏、バロックアンサンブル、ゴスペル演奏等の音楽演奏を楽しみ、またサンタからのプレゼントに興じたりしながら、楽しいひとときを過ごすことができた。また、クリスマス礼拝は人間福祉学部チャペルで静かに守り、神戸聖愛教会牧師の小栗献先生より「祝祭（まつり）としてのクリスマス」という題で奨励して頂いた。

参加者はクリスマス祝会が100余名、クリスマス礼拝の出席者は約60名で、昨年と比べるとやや減少した。来年は今回の反省点を踏まえて、開催時間やプログラム内容等を今一度検討し、より親しみやすいものになるように工夫していきたい。

（嶺重 淑）



Xmas in ARIKAWA

12	クリスマス祝会
19	18:10～19:40 G号館2階ラウンジ
会場：G号館2階ラウンジ 主催：人間福祉学部チャペル委員会 協賛：人間福祉学部教職員、学生他 問い合わせ：人間福祉学部チャペル委員会 TEL: 078-231-2311 FAX: 078-231-2312 E-MAIL: chapele@arika.ac.jp	
12	クリスマス礼拝
21	10:35～11:05 G号館チャペル
会場：G号館チャペル 主催：人間福祉学部チャペル委員会 協賛：人間福祉学部教職員、学生他 問い合わせ：人間福祉学部チャペル委員会 TEL: 078-231-2311 FAX: 078-231-2312 E-MAIL: chapele@arika.ac.jp	

今年もサンタのプレゼントを届けてあげよう

主催：人間福祉学部チャペル委員会

■ 人間福祉学部優秀卒業研究賞「あじさい賞」

人間福祉学部では、浅野仁名誉教授の寄付により、優秀な卒業研究を執筆した学部学生の努力を称えるため、優秀卒業研究賞（通称「あじさい賞」）を設けています。名前の由来は、あじさいを同氏が好まれたことによります。

最優秀賞・優秀賞には表彰状と副賞（図書カード10,000円）が贈られます。

2011年度の受賞者は次のとおりです。

・最優秀賞

國宗 美里 「生きづらさ」を抱える「普通」の子どもたちとその支援のあり方についての考察
—精神保健福祉士の立場から—

・優秀賞

野口真理子 ジェンダーおよびセクシュアリティ問題における当事者とは誰か—「わたし」への問いかけを通して考える“性の多様性”—
村口 宏 震災遺児のこころのケア—スピリチュアルニーズを考える—

人間福祉学部優秀卒業研究賞規程

(目的)

第1条 学校法人関西学院は、浅野仁氏（本学名誉教授）よりの寄付金をもって、人間福祉学部優秀卒業研究賞を設定する。

2 この賞は、人間福祉学部学生の学習・研究意欲を高め、勉学の向上をはかることを目的とする。（資格及び交付）

第2条 この賞は、毎年人間福祉学部において優秀な卒業論文等を執筆した学生に授与する。受賞者を毎年若干名とし、受賞者には賞状と副賞を授与する。

(所管及び運営)

第3条 人間福祉学部には優秀卒業研究賞（浅野賞）選考委員会を設け、受賞者の選考に当たる。

2 選考委員会の構成及び選考方法については別に定める。

(規程の改廃)

第4条 この規程の改廃は、選考委員会の議を経て、人間福祉学部教授会で決定し、理事会の承認を得るものとする。

附 則

この規程は、2011年（平成23年）4月1日から施行する。

「生きづらさ」を抱える「普通」の子どもたちと その支援のあり方についての考察

—精神保健福祉士の立場から—

國 宗 美 里

1. 論文の背景と目的

現代社会においては「自己責任」、「自己決定」などの議論に見られるように、主体としての「個人」に重きが置かれるようになっており、「個」の便利さや快適さを追求していくことで、社会全体の「幸福」を実現する思考が強まっているといえる。にもかかわらず、社会は「幸福」になるどころか、「ニート」、「ひきこもり」、「こころの病・自殺の増加」といった、新たに深刻な問題を抱えるようになり、社会全体に「生きづらさ」を生み出していく結果となった。それは、一見して問題があるようには見えない「普通」の子どもたちの中でも顕著にあらわれ、深刻さを増している。

こうした子どもたちが抱える「生きづらさ」に対して、教育、精神保健など様々な分野において調査研究が行われており、関心が向けられるようになったが、その学術的な共通定義はなく、具体的な支援の枠組みもないのが現状である。

これを受けて、本論文では、特に問題があるようには見えないにもかかわらず、日常生活の中で苦しみを感じている子どもたちを『「生きづらさ」を抱える『普通』の子どもたち』と称し、そうした子どもたちが抱える「生きづらさ」とは一体どのような性質を有するものであって、どのようにして発生してくるものなのかについて考察することを第一の目的とする。そして、その結果を踏まえ、子どもたちが抱える「生きづらさ」に対して、精神科的問題の発生の予防という観点から、国民全体の精神保健の保持・向上に資する役割も担う精神保健福祉士が関わっていく意義を検討することを第二の目的とする。

2. 先行研究レビュー

社会福祉学、社会学、心理学の三方面から文献

調査・分析を行った結果、現代の子どもが抱える「生きづらさ」とは、①障害、疾病、貧困、虐待、不登校、非行などといった明確な、そして合理的な理由がないにもかかわらず、日常生活の中に困難を感じることであり、②生得的なものではなく、社会や地域、集団を含めた他者との関係性やコミュニケーションなど、個人と環境の相互作用の中で生まれるものであるということ、③社会的要因による自尊心の低さにその一因があること、④時として、自傷行為や他者への攻撃、精神科的問題に結び付く可能性があるものである、という4点が上記3つの学問分野で共通していることが理解できた。

しかし、このような共通点がある一方で、どの先行研究においても子どもたちが抱える「生きづらさ」の具体的定義の確立や発生メカニズムの考察には至っておらず、「生きづらさ」を招く一因に何があると考えられるのか、様々な論考に断片的に散らばっているものの、それらがどのように作用し合っているのかは記されていない。

3. 「普通」の子どもたちが抱える「生きづらさ」とは何か

先行する各分野における知見の相互関連を分析した上で、「普通」の子ども「生きづらさ」に関する暫定的定義を行った。「普通」の子どもたちが抱える「生きづらさ」とは、「障害、疾病、貧困、虐待、不登校、非行などといった明確な、そして合理的な理由がないにもかかわらず、日常生活の中に困難を感じることであり、それ故に他者からは理解され難く、自分自身でも理解しにくいもの」であり、「その困難さは生得的なものではなく、社会や地域、集団を含めた他者との関係性やコミュニケーションなど、個人と環境の相互

作用の中で生まれ、この相互作用の中で循環しているようなダイナミックなものであって、一過性のものである可能性、個人の成長につながっていく可能性もあるが、場合によっては持続し、抑うつ、自傷行為、自殺行為といった精神的問題につながるなど、その後の個人の成長・人生に何らかの影響を及ぼす可能性があるもの」とする（以下、図参照）。

4. 精神保健福祉士が本件に関わっていく意義

「普通」の子どもたちが抱える「生きづらさ」を精神保健福祉領域で扱っていく意義を、先駆的に若者向けの精神科早期支援事業を行っているYMSC MIE（ユース・メンタルサポートセンターみえ）の精神保健福祉士の活動をもとに考察した。その結果、「生きづらさ」への支援に当たっては、①予防的意義、②ソーシャルアクション、③若者（子どもたち）がつながりやすい精神保健福祉サービス構築の意義の3つの意義を見出すことができた。

また、包括的・継続的な支援を行うための他職種によるチームアプローチやアウトリーチの実践、①～③の事柄を結び付け、より良い支援を行う上

でも、精神保健福祉士が持つパイプ機能が有効であり、ここにも意義を見出すことができるだろう。

5. 今後の課題

本論文は、「普通」の子どもたちが抱える「生きづらさ」には不明確な障壁が存在し、それ故に苦しみを覚えることを受けて、それを明確にし、精神保健福祉領域で扱っていく意義についても述べたが、そこには障壁やメカニズムを明確にすることによって、自ら子どもたちに「生きづらさ」というラベリングを行ってしまうという自己矛盾が生じている。

また、学校を基盤としたソーシャルワークとして既にスクールソーシャルワーカーが存在している。精神保健福祉士が学校現場や地域にアウトリーチを実施するにあたって、双方がどのような役割を持っているのか区別し、本件に対して精神保健福祉士が発揮できる専門性とは何かを整理する必要がある。

加えて、今回は「生きづらさ」を抱える「普通」の子どもたちを支援するための具体的枠組みの確立までには言及できなかった。これらの3点を今後の課題とする。

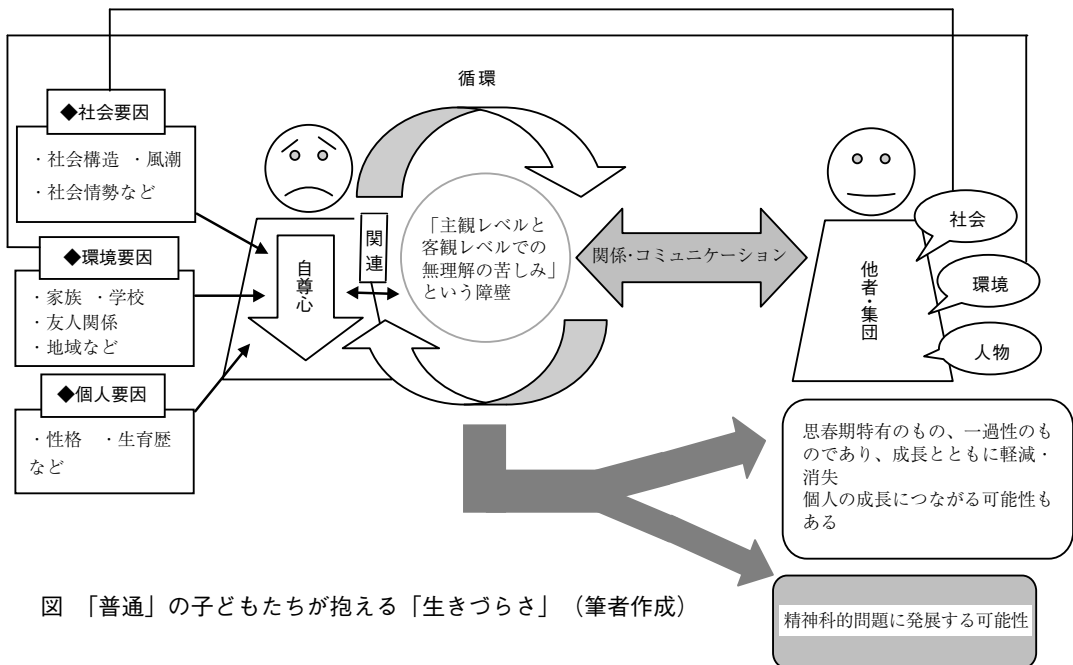


図 「普通」の子どもたちが抱える「生きづらさ」 (筆者作成)